

＜メサイア＞ 研究ノート I
—作品成立と初演・再演の背景をめぐって—

村原（田中）京子
(2003年10月20日 受理)

A Study of "The Messiah" I

—Background to the composition and the first and repeat performances—

TANAKA-MURAHARA Kyoko

要 約

オペラからオラトリオ創作へのターニングポイントとなった＜メサイア＞。作品の成立、初演、再演に至る過程を、当時の新聞、書簡、教会議事録等々の資料から拾い出し、考察、その背景を求めた。資料訳出の上、それらの行間に見え隠れする作曲者ヘンデルの心情、社会情勢、聴衆の作品享受状況などを明らかにした。30年に亘ってロンドンで活躍していたヘンデルが、何故アイルランドの首都ダブリンで初演したのか。その後のロンドン初演における音楽面以外の外圧、＜メサイア＞というタイトルを使えない状況は如何なるものであったか。名実共に不朽の名作としてロンドン音楽界に認められる迄に、創作以来10年の月日を要しているその過程を認識する＜メサイア＞研究の第1段階である。

キーワード：ヘンデル、ジェネズ、オラトリオ、メサイア、

§. 序

聴衆の一人として起立、感動に戦慄した＜メサイア＞のハレルヤコーラス、曲中の＜パストラール・シンフォニー＞はじめヘンデル特有のシチリアーノ・メロディーに魅せられ、「ヘンデル研究」をわが研究の道と定めて数十年。メサイア、メサイアという思いで第一歩を踏み出したものの、ヘンデル・オラトリオの基調にあるのは彼のオペラ及びオペラ活動であると40余曲のオペラ研究を、更にはオペラ、オラトリオの基盤となった初期のカンタータ研究が必須と、＜メサイア＞に辿り着かないままに年月が過ぎていった。無論その間、依頼によるレコードやCD解説、音楽雑誌原稿、はたまたテレビのヘンデル番組監修という仕事で＜メサイア＞及びその他のオラトリオに関わった

経験は数限りない。こうした経験が私のヘンデル研究を広げ支えてくれたことも事実であるが、徹底的<メサイア>研究をと常々考えていた。今後数年をかけて<メサイア>の詳細研究を進めていきたいと考えている。本稿(研究I)では、先ず<メサイア>成立、初演、再演の背景などの資料研究を中心とした。来年度以降、音楽的側面、自作品からの転用(借用)、ヘンデルの生前中同じ形で演奏された事が無いとされるヴァージョン研究、出版された数々の楽譜比較(エディション研究)、テキスト研究(聖書研究)、今日迄<メサイア>が歩んできた道程等々を研究課題として進めていきたいと考えている。

§. オペラからオラトリオへ

1710年から40年迄の30年間、イギリス・ロンドンにおけるヘンデルの活動はオペラ創作、オペラ劇場の経営が全てだった。再三の劇場経営不振、倒産を繰り返しながら、ヘンデルは18世紀イギリスにおけるイタリア・オペラを不動のものにし、40余曲のオペラ作品と凄まじいばかりの上演記録を残してくれた。その道は決して平穏なものではなく、ライバルオペラ劇団との抗争、有能歌手の争奪など創作以外の苦難が続いた。それらについては、前号(鹿児島大学教育学部研究紀要第54巻)で詳述したが、オペラの人気が危うくなってくると、しばしばヘンデルはオラトリオ作品をオペラシーズンの演目に乗せていた。1732年から38年迄の6年の間に少なくとも6曲<エステル>(1732)、<デボラ>(1733)、<アタリア>(1733)、<時と真理の勝利>(1737)、<サウル>(1738)、<エジプトのイスラエル人>(1738)を創作、劇場で上演している。それらのオラトリオ作品によって人気を取り戻し、創作の意欲、オペラ劇場経営の再興の勇気を与えられていた。ヘンデル当人は「自分の人気に戻った!」と考え、またまたオペラ創作・上演に燃える、そんな繰り返しの連続だった。それらはオラトリオという宗教作品でありながら、まさに<劇的オラトリオ>と呼ぶに相応しい作り、構成である。コーラスを主体に、数人のソリストから成り、オラトリオという演奏会形式を採っていた。しかし、楽譜を繰っていくとそれは、舞台装置、演技をつければオペラとしても通用するといえるものなのである。筆者は<サウル>、<ベルシャザール>、etc.のライナーノート執筆の折、歌詞全訳をし、概観を記し、楽譜と音源を照らし合わせながら解説した最終行に、「この作品を演技、舞台装置付きで演出・上演してみたい!」と書くことしばしばだった。ヘンデル・オラトリオをオペラと比較する時、唯一最大の相違は歌詞が英語であるということ!この言葉の問題が大きかったと考えられる。

演劇の国、シェクスピア劇伝統の国イギリスにおいて、舞台芸術としてのオペラは当初から素直に受け入れられた。それがイタリア語によるものであっても、舞台上で演ぜられる劇の発展、アリアの美しさ、歌手の技量の披瀝に人々は酔いしれた。しかし、母国語英語で語られる時、即ち英語によるオラトリオが彼等の前に鳴り響いた時、イギリス人聴衆の反応はオペラとは比べものにならなかったと言えるのではないだろうか。多くの聴衆がオラトリオに歓喜し、オペラとなるとその数は半減、空しい拍手が鳴り響いた。そんな繰り返しの6年の末、遂に1740年暮れからのシーズン、

オペラ＜デイダミア＞を最後に（初演は翌1741年1月10日）、ヘンデルはロンドンのオペラ界から去った。既にヘンデル56歳、身体的（脳卒中）にも精神的にも力尽きての引退に、世間は「ヘンデルは二度と立ち上がれない」と噂、報じた。

しかし、西に沈んだ太陽は、再び＜メサイア＞を掲げて東の空に昇ったのである。

§ . ＜メサイア＞

台詞作家チャールズ・ジェネズとの出会い

ヘンデルの初期オラトリオの大半（5曲）は、枢機卿パンフィーリ（Panfili, Benedetto）による台詞であったが、1738年の＜サウル＞においてはじめて、台詞作者としてのチャールズ ジェネズの名が登場する。このジェネズこそが＜メサイア＞の台詞を供した作家となるのである。ジェネズは＜サウル＞において聖書に対する深い造詣を示した。まさにドラマテック・オラトリオとして表現された台詞にヘンデルは歓喜し、一方以前からヘンデルの音楽に強い関心を抱いていたジェネズはヘンデル音楽の不滅を確信したのである。

このジェネズという人物、＜メサイア＞の台詞作家として、ヘンデルと共に後世に名を残しているが、一体その人物像は？ 音楽事典、人名辞典等々を繰っても、イギリス刊行のグローブ音楽事典（The New Grove Dictionary of Music and Musicians）以外には記述が無い。しかもグローブ音楽事典の初版（1878）（全5巻）以来、改訂・増判を重ねてきた第5版のリプリント版（1975）（全10巻）に至る迄、ジェネズの項は無く、初版後1世紀を経た1980年の改訂版（全20巻）に至って初めてその名が登場する。この1980年大改訂の監修代表者がイギリス当代きっての音楽学者、セイディー（Sadie, Stanley）というヘンデル研究者であることから、ジェネズの名が入ったのであろうが、その折の筆者はディーン（Dean, Winton）という著名なヘンデル研究者であった。近年（2001年）、当事典は改訂され、記載項目を大幅に増やし全29巻となって、昨年（2002）から全世界に販売されている。今回のジェネズの項の筆者はスミス（Smith, Ruth）、彼も又、近年活躍の目覚ましいヘンデル研究者である。前巻のディーンの記述とはかなり異なっているため、両版を参考にジェネズ像を描いてみよう。

The New Grove Dictionary of Music and musicians（1980年版、2001年版）： 両版の Jennens, Charles の項より

1700年ゴブサル生、1773年11月20日ゴブサル没

イギリスの（芸術）パトロン、作家、台本作家。オクスフォード、ベイリオル・カレッジに学んだ。レスターシャー、ゴブサルの富裕な地主の孫で、1747年ゴブサルの736エーカーという膨大な土地と6つの地方の34件の土地財産を継承した。今日ではヘンデルの友人、また彼の4曲のオラトリオの台詞作家としてのみ知られている。ヘンデルとの最初の関わりは1725年、ヘンデルのオペラ＜ロデリンダ＞の予約出版に名を連ねたことに始まる（ヘンデル40歳、ジェネズ25歳）。

筆者が所有する虫食いだらけの＜メサイア＞初版印刷本冒頭の予約者リスト＜A LIST OF

THE SUBSCRIBERS >にも、国王、女王に続きアルファベット順に、Jの項に CHALES JENNENS の名が刻まれている。それ以後ジェネズは予約制で出版されたヘンデルの作品すべてを予約購入しており、改訂された曲、上演されなかった曲、未完成の作品に至るまで総譜、パート譜の写しなどにも注文を出した。ヘンデルが1735年から49年の間にジェネズに宛てた手紙が9通残っている。二人は良き友人関係にあったが、創作上の意見の相違から不満をぶつけ合うこともしばしばだった。ジェネズの意見により<メサイア>の書き換えもあったとされる。

ジェネズは敬虔なプロテスタントであり、当時名誉革命後の（ウィリアム3世、メアリー2世、アン女王と続く）スチュアート王朝に対する忠誠を拒否した Nonjuror（宣誓拒否者）だった。

性格的には神経質で、恐らく躁鬱病（弟ロバートは自殺）だったとされ、終生未婚だった。

晩年、彼はシェクスピア悲劇の出版を手がけ、70年に<リア王>を、続けて<ハムレット>、<オテロ>、<マクベス>、<ジュリアス・シーザー>を出版した。これらの出版は、ライバルのシェクスピア出版者ジョージ・スティーブンスによって手強く罵られ、嘲笑された。ジェネズの書いた手紙の多く、特にエドワード・ホールズワースとの書簡はジェラルド・コーク コレクション（Gerald Coke Collection）、マルメスバリー・ペーパー（Malmesbury Papers）として所蔵されている。

オラトリオ復帰へジェネズの勤め

ロンドンのオペラ界から引退したヘンデル、30年間のオペラ経営に疲れ、消沈するヘンデルに再起を促したのはジェネズだった。

ジェネズは1741年7月10日、友人エドワード・ホールズワースに宛てた手紙の中で書いている^{註1}。

「・・・ヘンデルは次の冬は何もしないと言っていますけれども、私が彼のために書いた聖書の句に基づくもう一つの台本に作曲し、受難週間に彼自身の救済のために演奏するよう説得したいと思っております。彼がその才能と技の全てを注ぎ音楽がこれ迄のどの作品をも越え、素晴らしい作品となる事を願っております。その題材は他のどれよりも卓越しているのですから。その題材とは<メサイア>（救世主）です」

ヘンデル自身ですら、しばらくの休養を決め込んでいたその時、ジェネズから<メサイア>の台詞が提供されたこと、更に加えて、アイルランド総督ウィリアム・カヴェンディッシュから慈善演奏会開催への依頼が届いたこともヘンデルを、<メサイア>へと向かわせたのであろう。

<メサイア>作曲

<メサイア>の作曲に関しては、ジェネズの台詞に感動したヘンデルが時に涙しながら、また

^{註1} Ch. Hogwood : Handel p.167(Gerald Coke Collection)

召使いの運ぶ食事にも手を付けず創作に没頭し、20日そこそこで書き上げたと、速筆の逸話がまことしやかに語られる。しかし冷静にそれ以前のオペラ、オラトリオの例を見ると、速筆はヘンデルにとって珍しいことではなかった。しかし楽譜に記されているとされる日付を追ってみる事は必要であろう。

1741年8月22日（土曜日）に取り掛かり、第Ⅰ部の最終小節が6日後の8月28日、9月6日迄に、更に107頁 即ち第Ⅱ部‘ハレルヤ’の最終小節までを終了させている。次の土曜日9月12日には第Ⅲ部を終え、全259頁が書き上げられた。それから楽器編成を検討、内声の充実に2日を要し、9月14日“完成”と書き終えている。あの膨大な作品が24日間で完成、となると不可能に近いと誰しも驚き、様々な逸話を呼ぶことになったのであろうが、全てが新しく作曲されたものではなかった。それ迄も又それ以後もヘンデルは、自らの作品からの転用（借用）を日常的に行っていた。＜メサイア＞においても、かなりの曲数がそれに当たる。しかし、後世に於いて＜メサイア＞だけが突出し演奏され続けてきたため、それ以前の作品から持ち込まれた等という事は全く考えられず、＜メサイア＞の神聖視のみに一層拍車がかけられていると言えよう。これらの詳細は＜メサイア 研究ノートⅡ＞以降に纏めたいと考えている。

ダブリン上陸

当時の資料^{註2}によると、ヘンデルは恐らく1741年11月4日、ロンドンを発ち、チェスター、ホーリーヘッド経由で11月18日ダブリンに到着したらしい。上記資料詳細記述によると、ヘンデルの出発の日付は定かではない。アイルランドの海軍中尉が1742年2月のジェントルマン誌（Gentleman's Magazine）のなかで、ダブリンからロンドン迄の旅程に5日を要すると書いているが、チェスターで風を待つためにかかなりの日数引き留められ、更にチェーシャーのアドリントンホールにチャールズ・レグを訪問したらしい事もあって、ヘンデルはこの旅に2週間をかけたとなっている。無論彼はダブリンにその冬のシーズンだけ滞在するつもりだったが、結局1742年8月13日迄居たことになる。

1741年11月21日から翌年まで、上記のヘンデル・ドキュメントはダブリン・ジャーナル誌の記述が続く。ヘンデルの慈善演奏会、そして＜メサイア＞上演に関する記事迄、この間の記述は大変興味深い。

アイルランド・シーズンのために、ヘンデルはオルガニストのマクレーン氏、ソプラノ歌手のマクレーン夫人を伴ってアイルランド入りした。ロンドンでヘンデル作品を歌っていたソプラノのアヴォーリオ夫人は数日遅れて21日に到着している。アイルランド・シーズンで歌ったもう一人の歌手シバ夫人は本来は女優として有名で、既にダブリンの舞台でリチャード・スティール卿の戯曲＜恋人きどり Conscious Lovers＞に出演していた。彼女は当初ヘンデル・オラトリオで歌う予定で

註2. Otto Erich Deutsch : Handel A Documentary Biography P.523

はなかったが、途中から加わったとされる。ヘンデルの旧友でヴァイオリニストのマシュー・デュボルク氏は既に15年前から総督合奏団の長としてアイルランドで活躍しており、ヘンデルのオラトリオ演奏会のコンサートマスターを務めた。

ダブリンの最初のシーズンは12月19日、6つの予約演奏会が予告された。

期日：1741年12月23日～1742年2月10日

場所：ニュー・ミュージック・ホール（フィッシュンブル街）

演奏曲目：＜快活の人，沈思の人，温和の人＞（1740）

＜聖チェチリアの日のための頌歌＞（1739）

＜アチスとガラテア＞（1718）

＜エステル＞（1732）

その他，オルガンその他の楽器のためのコンチェルト

ダブリン・ジャーナルの伝える所によると、この6回の演奏会の他にシーズン前とシーズン途中、12月10日と翌年の2月8日の2回、マーサー病院のための慈善演奏会を開き、＜ユトレヒト・テー・デウムとユビラーテ＞（1713）及び＜戴冠式アンセム＞の中から2曲のアンセムを演奏している。

ヘンデルがジェネズに宛てた1741年12月29日の手紙^{註3}。

暮れも押し迫って初めてヘンデルはジェネズに宛てて手紙を書いている。

私がイギリスを離れる前に作曲した貴殿のオラトリオ＜メサイア＞に感謝申し上げます。貴殿のご親切に勇気づけられております。貴族の方々は私に600人の席が満席になる6夜の予約演奏会の栄誉を与えてくれました。ですから私は入り口に立って1枚たりともチケットを売る必要がありませんでした。私がロンドンから連れてきたアヴォーリオ夫人は大変素晴らしく、他のテノール、バス、カウンターテノールも大満足、コーラス団もオーケストラの人達も大変優れています。デュボルク氏がコンサートマスターで、音楽は魅力的なホールで心地よく鳴り響きました。私も一心にオルガンを弾きいつも以上の成功を収めております。＜快活の人，沈思の人，温和の人＞でシーズンを開幕しましたが。最後の＜温和な人＞の歌詞は大変称賛されていますのでご安心下さい^{註4}。聴衆は主教，司祭，大学の学長，法曹界のお偉方等です。・・・（中略）・・・ここで得る事の出来た丁重な扱いに何と言って良いやら言葉ありません。6夜の演奏会が終了しても更に多くの演奏会が既に約束されています。総督は毎晩ご家族と聴きに來てくださいます。総督は陛下から私の滞在期間延長が容易に許可されると考えておられますので、私が考えているよりも当地に長く滞在す

註3. O. E. Deutsch：前掲書 p.531～2

註4. 第3部＜温和の人＞はジェネズの加筆によるものである。

る事になるでしょう。貴殿の健康とご幸福に関してお便りお待ちしております。・・・（後略）・・・。

ダブリン第2シーズン、そして＜メサイア＞初演

ダブリンの第2シーズンも、1742年2月17日から4月7日迄、同じくニュー・ミュージック・ホールで＜アレクサンダーの饗宴＞他6曲が予告（2月6日予告）され、順当に進み始めた。この頃既に、ヘンデルを招聘した総督ウィリアム・カヴェンディッシュはダブリンを離れていたが、彼の力を借りずともダブリンにおけるヘンデルの名声は確固たるものとなっていた。

ダブリン招聘を受け瞬く間に書き上げ、彼自身も自信を持っていた＜メサイア＞ではあったが、初演の機を探っていたのか、ヘンデルはなかなか＜メサイア＞を上演しようとはしなかった。

ダブリンにおける自らの評価を固めてからという思いがあったのだろうか。ようやく第2シーズンの半ばを過ぎて、シーズン終了後の大規模な慈善演奏会として予告している。

＜メサイア＞初演予告^{註5}

ダブリン・ジャーナル 1742年3月27日

いくつかの監獄における囚人救済とステファン街マーサー病院及びインズ・クウェイの慈善診療所支援のために、4月12日月曜日、フィッシュンブル街のミュージック・ホールで＜メサイア＞と呼ばれるヘンデル氏の新しいグランド・オラトリオが演奏されます。二つの大聖堂の聖歌隊の紳士方が賛助出演し、ヘンデル氏によるオルガン・コンチェルトも演奏されます。チケットはミュージック・ホールまたはクライスト・チャーチのニール氏邸において、1枚半ギニーで得られます。注意：どなたもリハーサルにおいてもリハーサル・チケットが無いと入場出来ません。演奏会のチケットを購入された方にはリハーサル・チケットを差し上げます。

ダブリン・ジャーナル 1742年4月3日

4月7日（水）のオラトリオ＜エステル＞とオルガン・コンチェルトの予告記事の後に、

4月8日木曜日、ミュージック・ホールにおいてヘンデル氏の新しいグランド・オラトリオのリハーサルが行われる事を予告。

ダブリン・ニュース=レター 1742年4月10日

昨日朝、ミュージック・ホールでヘンデル氏の新しいオラトリオ＜メサイア＞の公開リハーサルが行われました。（予告では8日の予定であったが、1日延期され9日朝に行われた）

当地で又他の国（イギリスを指す）で演奏されたどんな作品をも遙かに凌ぐ素晴らしいものだと、

^{註5} O. E. Deutsch：前掲書：p.542～546

優れた批評家達も認めています。気品溢れる演奏会は整然と指揮され、満員の礼儀正しい聴衆は大変満足しました。3つの重要な公共施設慈善のために行われる当オラトリオの大演奏会は13日、火曜日午前に行われます。

ダブリン・ジャーナル 1742年4月10日

ニュース=レターと同じく昨日の<メサイア>リハーサルへの賛辞の後、

N.B (注意)：幾人かの高貴な方々の要望により上記の演奏会は13日、木曜日に延期されました。開場は11時、開演は12時です。この高貴なる大慈善演奏会のために作曲された作品を支援する多くの紳士淑女達は以下の様に望んでおられます。この演奏会に参加出来る榮譽を得たご婦人方にはフープ^{註6}無しでご来場下さいます様に。より多くの方々が入場出来ることによって、慈善の意味も一層増すことでしょう。

ダブリン・ジャーナル 1742年4月13日 広告

慈善音楽協会のスタッフの方々は、言っておられます。本日フィッシュャンブル街のミュージック・ホールに行かれるご婦人方はフープを付けてお出かけになりませぬ様に：殿方も剣を付けずに行かれます様に。

今日、<メサイア>と呼ばれるヘンデル氏の新しいグランド・オラトリオが演奏されます。

(ダブリン ニュース=レター及びダブリン ガゼット (新聞) にも同様の広告が出された)

<メサイア> キャスト 1742年4月13日

ソプラノ：アヴォーリオ夫人、マクレーン夫人

コントラアルト (メゾソプラノとアルト)：シバ夫人、ウィリアム ラム氏、ヨセフ ワード氏

テノール：ジェイムス ベイリー氏、ジョーン チャーチ氏

バス：ジョーン ヒル氏、ジョーン メゾン氏

クライスト・チャーチ所属のメゾン氏を除いて、男性全員が当地の2つの教会に属している。

ダブリン・ジャーナル 1742年4月17日

先日の火曜日 (13日) にフィッシュャンブル街のニュー・ミュージック・ホールでヘンデル氏の宗教グランド・オラトリオが演奏されました。名高い批評家達もその作品が最も完成された音楽であることを認めています。その作品が、称賛する聴衆達に与えたこの上ない喜びを、言葉で表わす事は出来せません。気高く荘厳で感動的な歌詞に付けられた音楽の崇高さ、壮麗さ、心優しさは、うっとり聞き惚れる心と耳を捉え魅了しました。世間が知るべきこと、それはヘンデル氏に対す

註6. スカートを張広げるための張り骨

る正当な評価以外の何ものでもありません。ヘンデル氏はこの大演奏会の収益を、囚人救済協会、慈善診療所、マーサー病院に等しく分け寄付します。彼の名は永久に残ることでしょう。二つの合唱隊の紳士諸氏及びデュボルク氏、アヴォーリオ夫人、シバ夫人、皆その役を見事に歌いました。又、彼等も同様に私心の無い道義で行動し、聴衆から正当なる喝采を受け、こうした有益な大慈善事業を成し得た喜びで満たされました。会場はおよそ700人の聴衆で埋まり、高貴で敬虔なるこの慈善事業のために集められた収益は400ポンドに達しました。その内127ポンドづつがそれぞれ三つの慈善事業に捧げられます。

上記数々の新聞資料から明らかな様に、アイルランド総督がオペラではなく、オラトリオ作曲家としてのヘンデルをダブリンに招聘したこと、最初から慈善音楽会という形態での招きであったこと、折しも慈善には最も相応しい＜メサイア＞のテキストがジェネズから届いていた事等々、全てが＜メサイア＞誕生の偶然要因、否、神からの使命を担っていた。その上、ヘンデルの身体も脳卒中の発作に見舞われ。自身再起のエネルギーを失っていたその時に与えられた使命だった。ダブリン総督は新しい作品までは求めていなかったのだが、結果的に＜メサイア＞という後世に残る名曲がダブリンで初演されることとなった。

好機をみての初演予告、しかもリハーサル、本番共に予定を1日順延するという、結果的に巧妙な策、事前の大袈裟な新聞広告も手伝って、600席のミュージック・ホールは700人の聴衆で埋まったのである。

此までロンドンにおいて数々の苦難を嘗めてきたヘンデル、二度と立ち上がれないと訛されたヘンデル、しかし世渡りに長けた彼は、ロンドン以外の地で確固たる名声を建て直し、その噂がロンドンに届くことを狙ったのであろう。飽きられた地ロンドンで＜メサイア＞を初演するなどという考えはヘンデルには毛頭無かったと思われる。

初演の大成功に加えて、貴族達の特別な望みによって再度、6月3日夜7時（リハーサル6月1日昼12時）ダブリン・ミュージック・ホールにおいて再演された。これまたダブリン・ジャーナル（5月25日）には、暑さ、熱気を予想して、出来るだけ涼しくするために会場の一番上の窓ガラスを外すと報じられている。

ダブリンの成功に勇気づけられ、ヘンデルは1742年8月13日ダブリンを立ち、再びロンドンに戻り、秘かにロンドン音楽界復帰の機を狙っていた。この頃のヘンデルの心境は、ロンドンに戻ったヘンデルが、ジェネズに宛てた手紙から推察できる。

ヘンデルがジェネズへ宛てた1742年9月9日の手紙

かの地での高い評価を直接私の口から報告申しあげるべく、アイルランドからロンドンへの帰途貴殿にお会いするつもりでおりましたがそれを果たせず、＜メサイア＞テキストの印刷本をお送り致します。（中略）来るべきロンドンにおけるオペラ・シーズンの監督が私に任されているという噂は全く根拠のないものです。友人達が望んでいる様に、オラトリオで何かをやるかどうか、私は

未だ決めておりません。アイルランドで12ヶ月にわたるオラトリオ・シーズンを持つことは確か
で、予約を大々的に募っているとのことですから・・・（後略）・・・。

ロンドン音楽界復帰

ヘンデルはすぐさま＜メサイア＞を上演することはせず、1年前＜メサイア＞作曲直後に手がけ
ていたオラトリオ＜サムソン＞の最後の仕上げに専念。1743年四旬節の間、6回のオラトリオ上演
を告げ、2月18日コヴェント・ガーデン劇場^{註7}において＜サムソン＞で開幕、国王はじめロンド
ンの貴族達の注目を一気に取り戻した。その成功を報じる資料は、ロンドンではなく、アイルラン
ドのダブリン・ジャーナルに見られる。

ダブリン・ジャーナル 1743年3月15日

3月8日、ロンドンからの個人的手紙よりとして、
我らが友ヘンデル氏は大変素晴らしい、以前とは全く異なる形でこの地（ロンドン）に戻ってき
ました。かつてのイタリア人歌手によって輸入された悪しきオペラではなく、彼ヘンデル氏とイギ
リスの演奏という価値を見出したのです：氏はかつてよりも一層尊敬されております。彼がアイル
ランドを離れて以来作曲した＜サムソン＞という新しいオラトリオが演奏され、此までに見たこと
もない程大勢の聴衆で埋まっています・・・。

この大成功を受けて残り5回の演奏会全て同じ作品＜サムソン＞が続けられ、更にシリーズの延
長が広告された。これらの広告を細かにみても、＜メサイア＞に関する記述は何一つ発見出来ない。

＜メサイア＞ロンドン初演

2月18日の＜サムソン＞初演、それに続く人気の再演を経て、ようやく3月19日の新聞に＜メサ
イア＞と思しきオラトリオ上演の広告が出された。

デイリー・アドヴァタイザー紙 1743年3月19日

来週水曜日（23日）コヴェント・ガーデン劇場に於いて＜新しい宗教オラトリオ＞が演奏されま
す。オルガン・コンチェルトも、デュボルク氏によるヴァイオリン・ソロもあります。チケットは
来週火曜日にブルック街のヘンデル邸で予約券が入手できます。開演は6時。

ロンドンの聴衆の前には＜メサイア＞が初めて登場したのは＜新しい宗教的オラトリオ＞の名称
だった。この広告が当時のイギリス社会、ヘンデルの心情の全てを物語っている。敢えて＜メサイ
ア＞としなかった、出来なかったという証であろうか。かつて10年前、オラトリオ＜エステル＞初
演の折、4年前の＜エジプトのイスラエル人＞、更に＜サウル＞において、劇場で宗教オラトリオ

註7. かつて1734年から36年迄オペラ活動していた劇場

を上演した事で非難された経験がよぎった事は間違いない。ダブリンでは自由に使っていた＜メサイア＞というタイトルを避けなければならなかった。＜新しい宗教的オラトリオ＞予告に対して、すぐさま（同日）、未だ演奏前であるにも拘わらず、忠告（？）・非難が浴びせられている。

ユニヴァーサル・スペクテーター紙 1743年3月19日（一寄稿者の投書として）

‘自称音楽愛好家’と称し、‘フィラレシズ PHILALETES’というペンネームで、オラトリオとは宗教的行為でしょうか、それともそうではないのでしょうか。もし宗教的行為であるのならば、私はお尋ねしたい。劇場がそれを演奏する寺院にふさわしいのでしょうか。また、そこで演奏する人々が、神の御言葉を伝える聖職者たり得るのでしょうか。（中略）

旧約聖書が汚され、御神がエホバの名によって汚されたばかりでなく、新約聖書が加えられ、神が最も神聖な慈悲深いメサイアの御名によって汚されているのです。聴くところによると、その名のオラトリオがアイルランドで演奏され、近々当地でも上演されるといいます。その作品がどんなものであるか存じませんので云々出来ませんが、これだけは再度お尋ねしたいのです。上演の場所と演奏者がそれに相応しいのかと。

ヘンデル自身、無論こうした人々（フィラレシズのような人達）の感情を損ねる危険を感じ、＜新しい宗教的オラトリオ＞としたのである。

＜メサイア＞ロンドン初演のキャスト 1743年3月23日

ソプラノ：アヴォーリオ夫人（or エドワーズ嬢）クライブ夫人，少年

コントラアルト：シバ夫人

テノール：バード氏

バス：ラインホルト氏

アヴォーリオ夫人、シバ夫人等、ダブリン初演で成功を収めたキャストを入れ、タイトルに対する作曲家自身の配慮にも拘わらず、3月23日のロンドン初演に関しては、どの新聞も沈黙を守り、その評価は全く明らかでない。当シーズン中、先の＜サムソン＞が8回演奏されたのに対し、＜メサイア＞は3回に留まったという演奏記録のみが＜メサイア＞の窮地を物語っている。

このロンドン初演において、その後の＜メサイア＞演奏形態に及ぼす画期的ひとコマ第2部の最終曲＜ハレルヤ＞が始まると聴衆全員が起立するという演奏形態がここに始まったのである。

＜ハレルヤ＞の‘for the Lord Got Omnipotent reigneth 万物の支配者であり、我々の主たる神’と歌われ始めたとき、臨席されていた国王ジョージ二世が立ち上がられ、聴衆がそれに続いた。今日、世界中何処でも＜メサイア＞の演奏で、＜ハレルヤ＞に入ると、聴衆全員が起立する。このしきたりはロンドン初演の国王陛下を倣ったものとされている。

様々な理由が考えられよう。国王が立たれたのに、人民が座ったままでは居れない、全能の神を

歌っている箇所だから座ってはいは・・・等々。しかし、劇場でオラトリオを？<メサイア>を？という非難の中で、従来ヘンデルをお気に入りの国王が彼に与える事の出来た唯一の形ある称賛、思い余って賛辞の形だったと考えたい。

新聞等公共評価の無いロンドン初演に対しても、ヘンデルは冷静に、いずれやって来ると確信し、機を待っていたと言わざるをえない。先に掲載した1942年9月9日のジェネズに宛てた手紙の中で、ヘンデル自身が述べている様に、その後再びアイルランドにおいて<メサイア>がオラトリオ・シーズンの呼び物になった事が、資料（ダブリン・ジャーナル紙）から窺える。

1744年、1月14日の同紙に慈善音楽協会からの申し出として、「(前略)・・・ヘンデル氏の<メサイア>と呼ばれる宗教的オラトリオが当地で再び演奏され、その収益が慈善に供される」旨報じられ、10日後に以下の確定的予告が見られる。

ダブリン・ジャーナル 1744年1月24日

ヘンデル氏の<メサイア>と呼ばれる宗教的オラトリオのリハーサルが、次週2月1日、水曜日昼12時、フィッシュンブル街のミュージック・ホールにて行われる。ネッターヴィル伯クリケット杯の試合が金曜日に行われるならば、本番は1日順延されるかもしれない。その事については、リハーサルの際に明らかにされます。

その後、ダブリン初演の際と同じく、ご婦人方にフープ無しでの来場を求める記事がみられる。ダブリンでは熱狂的に受け入れられ続ける<メサイア>。

ロンドンでは誰も声を出せなかった<メサイア>に対する評価ではあるが、真に音楽を愛する人々の心に、<メサイア>が燦っていた事は窺える。

ヘンデルは1744年の四旬節のシーズンに、<メサイア>をプログラムに入れようとはしなかった。こうした事態に、音楽を擁護し、ヘンデルを支援していたデラニー夫人が、四旬節の終わり頃、妹アン（デュヴ夫人）に宛てた手紙に述べている。彼女は<メサイア>が四旬節シーズン最後のコンサートの演目になるかも知れないと期待していたらしく、“ああ何と、昨夜はオラトリオ週間最後の夜でした。締めくくりは<サウル>でした。私は<メサイア>を望んでおりましたのに”と綴っている。

<メサイア>ロンドン再演

そうこうするうちに、ヘンデルは1744年から45年にかけてのシーズンでロンドンにおける<メサイア>復活を決意したのだった。その年（1744年）の11月、当初シーズンを24回の演奏会で終了する計画をたて、<メサイア>の再演時期を狙っていたと考えられる。舞台女優として、またヘンデル歌手としても人気の出ていたシバ夫人の獲得に力を入れ、準備を進めていた様である。しかし、

シーズンは余り旨く進まず、1 / 4 の日程を終えた時点（6回）で、ヘンデルはそれ以上続けることの困難を感じたらしい。シーズンの短縮を告げ、予約申し込み金の3 / 4を払い戻す事を願い出た。この事態は逆にヘンデルに好意を寄せる人々を喚起させシーズンは続行、辛うじて16回の興行が可能になった。ヘンデルに好意を寄せる人々、即ち彼等の望んでいるのは、＜メサイア＞の再演に他ならなかった。ヘンデル自身も＜メサイア＞でのシーズンの終了を目論んでいた。結局、第14、16回（4月9日、11日）に＜メサイア＞が再演されている。今回は演奏会場をハイマーケット国王劇場に移しての公演だった。

デイリー・アドヴァタイザー紙 1745年4月9日

国王劇場において、本日＜宗教的オラトリオ＞が演奏されます。オルガン・コンチェルト付で、6時半開演

此処でも＜メサイア＞という名称は使われず、同紙の4月6日及び8日の予告広告においても＜宗教的オラトリオ＞の文字のみが見られる。

この再演のあと、偏見は次第に減じ始めたと考えられる。とはいえ表だった直接評価、新聞批評などは出来なかったのであろう。ヘンデルを、＜メサイア＞を、称える行為として同年出された詠み人知らずの詩こそ、当時の価値ある評価と考えたい。

それは4行詩、37句、148行に及ぶ長大な称賛歌＜An Ode To Mr. HANDEL ヘンデル頌詩＞である。その詩の中から、特にヘンデル賛歌、メサイア賛歌となっている101行目からの7句、28行を訳出する。

＜ヘンデル頌詩＞ 作者不詳 1745年

（前略）

何と素晴らしい、身の震える程に素晴らしい歌の調べよ
 愛の調べを、そして穏やかな慈悲の心を主が歌う
 予言者の唇から出たその歌声は
 天上の炎へと達した

心癒す響きの魅力の中で
 心地よい平和を満喫し
 その前奏曲はコーラスのエネルギーの壮大さに通じ
 朗々たる調子で声高らかに歌い挙げる

救世主＜メサイア＞の名を高らかに、権力と

驚異と知恵を併せ持った主－平和の王子
 彼こそ教会に集う子羊に餌を与うる御方
 子羊たちを導く御方

トレモロの響きの何と素晴らしい優しさよ
 シンフォニーの豊かな響きが周囲を包み
 悲しみ溢れる旋律で主に敬虔な哀れみを表し
 人の悲しみを歌い上げる悲哀

魂に苦悩が重くのしかかり、苦しみが死の筋書きを深く覆い
 －死を願望するとき－打ちのめされそうになった時
 その時、死に打ち勝った主が
 墓の中から突然現れる

彼は力強く馬にまたがり、激しい風を切って飛翔し
 主のために開かれた天空の広い入り口を通して
 限りない永遠の場所へと
 栄光の王は統治する

主の統治は権力、支配、王位を轟かせ
 天空のいと高きハレルヤ
 鳴り渡る賞賛の声は天空の轟きと
 一緒になってハレルヤ
 (後略)

この後、即ち1745年以降3シーズンに亘って又々<メサイア>は沈黙だった。

4年を経て1749年のシーズンに、ヘンデルはたった一回だけ<メサイア>演奏を決意した。

ジェネラル・アドヴァタイザー紙 1749年3月23日

王立コヴェント・ガーデン劇場において、本日<メサイア>と呼ばれる宗教的オラトリオが演奏されます。コンチェルト付きで6時半開演。

此処に至って大胆にも<メサイア>のタイトルで広告されている。

捨子養育院＜メサイア＞の始まり

これ以降ようやく、毎年＜メサイア＞は演奏され続けたのである。翌年1750年、捨子養育院での＜メサイア＞公演が計画されたことは、その後の伝統的＜捨子養育院メサイア＞の始まりとなった。捨子養育院の新しい礼拝堂のオープニングを祝う演奏会が計画され、その目的のために設立された小委員会がヘンデルにその主旨を申し出たのである。親の無い子供達への慈善に駆り立てられていたヘンデルは二つ返事でそれを受諾した。彼は教会へのオルガン寄贈に加えて、自らがオルガン開きをし、その折＜メサイア＞を演奏することをも申し出たとされている。

捨子養育院における＜メサイア＞演奏へのお誘い

1750年5月1日養育院にて

親に見捨てられた子供達の生活維持と教育のために1750年5月1日火曜日、昼12時、養育院において、ジョージ・フレデリック・ヘンデル氏によって作曲された＜メサイア＞と呼ばれる宗教的オラトリオが演奏されます。

殿方は剣を付けずに、ご婦人方はフープ無しでお出かけになります様に。

注意：献金はありません。チケットは養育院の事務所会計、セント・ジェームス街アーサーのチョコレート・ハウス、コーンヒルにあるバトソンのコーヒーハウス、そしてデヴェロー路地トムのコーヒーハウスでそれぞれ半ギニーで購入できます。

翌2日付けの捨子養育院議事録には、＜メサイア＞の大成功とヘンデル氏への感謝、非常に多くの聴衆が訪れ、皆その素晴らしさに満足であったこと、ヘンデル及び参会者への慈善行為への感謝が綿々と綴られている。

ロンドンにおける＜メサイア＞不遇の立場は、ここへ来てようやく陽の当たる存在となり、新聞紙上でも取り上げられる様になった。

ジェネラル・アドヴァタイザー紙 1750年5月4日

1750年5月2日^{註8}捨子養育院礼拝堂での演奏会があり、そのチケットは予約に限られていたが、非常に多くの人々が当日券を求めて群がり、チケットを持っている人が閉め出されるという大混乱になった。こうした人達の失望を回避するために、又慈善のためにヘンデル氏は＜メサイア＞という宗教的オラトリオを、15日火曜日昼12時、養育院礼拝堂において、彼の指揮で行う。チケットが引き渡されます、最初の演奏会で買えなかった方でもそこで受け取れます。

以来＜メサイア＞の人気は確定的なものになり、普遍の賞賛を勝ち得、ヘンデルの死まで毎年、

註8. 捨子養育院議事録等全て5月1日とあるが、同誌に2日とあるのは恐らく間違い。

当礼拝堂で演奏され続けた。その上、同年ヘンデルのこの寛大な慈善行為が認められ、彼は捨子養育院院長に選出されている。毎年収益は増え、例えば1753年の演奏で得られた収入合計は496ポンド、54年は607ポンド17シリング6ペニーに昇ったと記録にある。

以上述べて来た様に、ダブリン初演大成功、自他共に悶々たるロンドン初演、再演への苦渋の道、そして捨子養育院教会で市民権を得る迄に、およそ10年の年月を要したことになる。

ロンドンの音楽界、否むしろ貴族社会、宗教界が<メサイア>を拒否している間に、熱狂的初演から支持し続けたダブリンは無論のこと、ロンドン以外の地でも<メサイア>が演奏された形跡が残されている。これらについては今後調べ上げていきたいと考えている。

<メサイア>誕生からおおよそ10年の道のりを当時の資料中心に辿ってきたが、それらが演奏の度に異なっていたこと、考えていた以上に様々なヴァージョンがあり、変遷課程を明確にすることが筆者の必須課題である。また、今日に至るまで世界的に愛され続けている<メサイア>の演奏歴、収録歴、演奏比較等々興味は広がる。さらにテキストに拘わる聖書研究は、初心に返り聖書の読み直し、熟読から始めなければならない。

冒頭にも述べた様にじっくり年月をかけて<メサイア>研究に取り組んでいくことを覚悟させられた導入論である。

参考文献

- Burney, Charles : A General History of Music(1776)
 Burrows, Donald : Handel(1994)
 Dean, Winton & Knap, John Merrill : Handel's Operas(1987)
 Deutsch, Otto Erich : Handel A Documentary Biography(1955)
 Hogwood, Christopher : Handel(1984)
 Lang, Paul Henry : Gerge Frideric Handel(1972)
 Larsen, Jens Pete : Handel's MESSIA(1972)
 Sadie, Stanley : Handel(1968) 邦訳:ヘンデル(村原京子訳) (1975 全音楽譜出版社)
 Shaw, Watkins : The Story of HANDEL's MESSIA(1963)
 Smith, Ruth : Handel 7 s Oratorios and Eighteenth-century Thought(1995)
 Smith, William G : Concerning Handel(1948)
 Streatfeild, R A : Handel(1964)
- The New Grove Dictionary of Music and Musicians(1980) (2001)
 Neue Handel Ausgabe Georg-Friedrich-Handel-Gesellschaft(1995)
 音楽之友社:西洋音楽史年表(シェリング編, モーザー補, 皆川達夫訳)